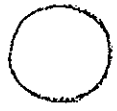


「イヘ」と「ハカ」
その一

「コトヲマ」としての本義

アマ-----^{オヤ}大宇宙、万物の産出者（祖、母胎）



（未来、197頁はか参照）

→ 神名としては、^{オホミカミ}大御神、^{ミオヤノカミ}御祖神、など。

オホミソラ-----^{ヒラミ}六面晃耀の零海、^{カミ}神聖の^{アレ}生ます^{トコロ}胎。



（未来読台本、325頁、参照）

→ 結果として「アマ」と同義。

イヘ-----（人間がそこから）^{ヤド}発展上昇すべき胎。



（同、326頁、参照）

→ 等しく「母胎」であるが故に、究極的には
「アマ」と同義になる。（未来、197頁、参照）

ハカ-----^{ミタマ}光り輝く魂、（^あおまび、^かその在り処）



（未来読台本、335頁、参照）

→ 日常語としては「人間死後の家」（同、332頁）

のことだが、これもまた究極的には

「生死を超越したるイヘ」のことであり、

「顕界神域と幽界魔境との一致点」であり、

結果として「全宇宙」と同義になる。

（同、335頁、参照）

小引

昭和九年五月七日、父を喪^{ウシナ}ひし時、齋^{マツリ}廷^{ノリト}の祕事を得たり。之を、「死生觀」として、刊行したるは、祖神垂示の神傳を明にし、祓禊^{ミソギ}の結果を知らしめ、併せて、父を紀念せんと願へるなり。

然れども、神事^{カミ}の教ふところは、一圓光明の零界^{ヒンクニ}に於ける、生滅起伏なれば、人間生活に繫縛せられては、時として、「有^{リテ}目而不^レ睹、有^{リテ}耳而不^レ聽、有^{リテ}鼻舌而不^レ分^ク香味^ヲ、備^{リテ}身意而不^レ辨^ル觸法^ヲ」にも似たる憾有らんか。

昨年十月十七日、旅中にして、祖神垂示^{アマテラスヒノミコノカミノミコリ}の神嘗祭儀を遙拜す。傳へ聞く。神嘗^{カミノミテエ}は、御身^{イザナギノオホミカミノオホミマノハラヘ}の禊禊^{ミソギ}なりと。御身^{オホミマノハラヘ}の禊禊^{ミソギ}とは、三貴子御生誕^{ミハシラノウツノミコアレマシノミコリ}の神儀なることを、古典は明記したり。然れども、神嘗祭儀^{カミノミテエ}が、御身^{オホミマノハラヘ}の禊禊^{ミソギ}なることを、明記したる典籍有るを聞かず。寡聞なるが爲か。或は、史、之を缺けるものか。舊記、古典は、文書に過ぎざるが故に、神儀行事を記すこと容易にあらず。神儀行事は、神より神に傳ふるにあらずれば、完全なる傳統にあらざるべし。蓋、人にして、此の事に關與するは、僅に、直日^{ナホヒ}の發^{ヒラ}くに依るのみなりと。

祓禊^{ミソギ}を語ることの難きは、如此なり。然れども、語らざれば、發^{ヒラ}け難く、記さざれば、傳へ難し。

曩に、滿洲帝國皇帝は、國本奠定の詔書を發し、滿洲國家の進退は、日本天皇の、惟神の大道に依るべしと命

人間の死と身魂城の關係について

直日は、本來の神であるから、死と共に肉體身とは別れる。それは何如なる人も例外は無い。次ぎには、意識・想念等の所謂心であるが、之は、その人の信仰何如に依つて、直日と俱に神界に入るものと、各界に分散するものとが別れる。奇魂・幸魂・眞魂・和魂・荒魂・術魂・直毘魂・等と呼びなす各々の御魂は、その人の存在するが故にそれ等各々の御魂であるのであるから、人の死と同時に分離するのが常道である。それで、御魂齋のノリトは。

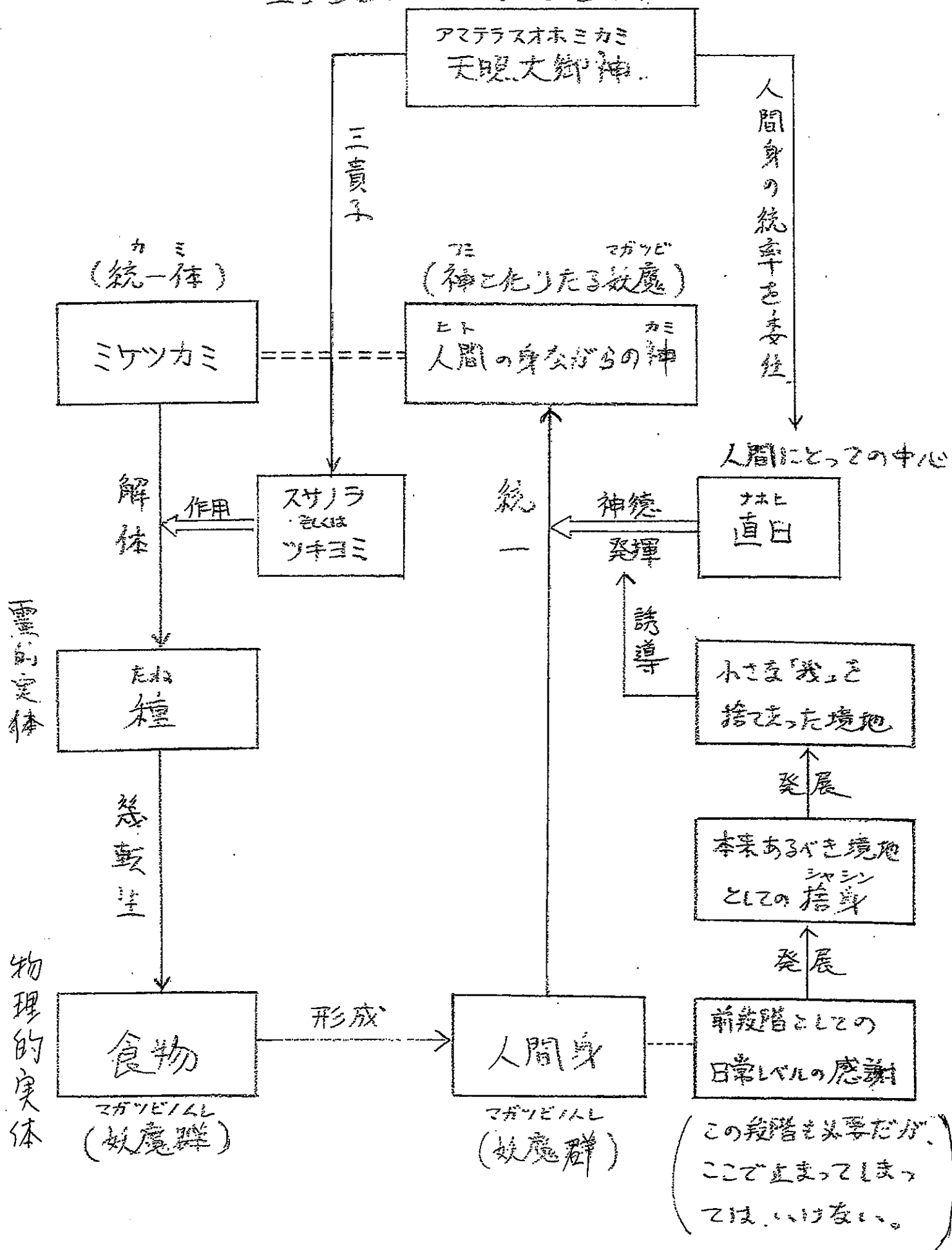
「ユクヒトノ、ユコロシレバ、カニカクニ、トクカヘリマセ、イツカシガモト」と教へて、人の死と同時に、その根本魂たる直日は、人間身統率の任務を終りて、その本の神位カミクラに歸り往くから、第二魂以下の御魂は、速に別離して、「身魂城」に移り止まるやうにと、その御魂を伊都伎祭るのである。重ねて白しますと、いかなる御魂をも、一度は必、常道に引き入れてから、それを更に聚めて、國津神と伊都伎祭り、産土神と成らしめ給ふのが、故人奉齋の筋道である。

間身は統一體である。統一體であるとは、「大國主神の兄弟たち、八十神坐したれども、國をば大國主神に避りまつりき」と、古典にあるので判明るやうに、八十神たる群衆魂の中心には、大國主神として、八十神を統治し統率するところの主神が坐すので、其の主神を、人間身の上では、直日と稱へて、日神天照大御神の依さし給へる、「神」にてましますのである。此の「神」たる直日が、中心に坐して、全身心を完全に統治したる時、統一體たる實を顯彰し得たので、人間身に攝取せられた妖魔群は、妖魔のままに、直日たる神 德を發揮するので、之を、神と化りたる妖魔と呼ぶのである。それだから、我が直日の德を發揮するか否かに依つて、食をも衣をも住をも、生かすか殺すかが別るるのであり、豐受比賣神と成らしむるか、海鼠の禍物となすかの別も決るのである。

「須佐之男命が、黃泉比良坂まで追ひ來りまして、大穴牟遲神に、其の汝の持てる生大刀と生弓矢とを以ちて、汝が庶兄弟をば、坂の御尾に追ひ伏せ、河の瀬に追ひ撥ひて、汝大國主神と爲り、亦、宇都志國玉神と爲りて、我が女須勢理毘賣を嫡妻と爲て、宇迦能山の山本に、底津石根に、宮柱布刀斯理、高天原に、冰椽多迦斯理て居れ、と詔せられた。そこで、大穴牟遲神は、その大刀と弓矢とを持ちて、庶兄弟である八十神、即、妖魔群たる肉體身、即、八十萬魂を、坂御尾ごとに追ひ伏せ、河の瀬ごとに追ひ撥ひて、國作り治められた」と云ふことは、擾擾紛紛たる肉我肉慾を制御し統一して、完全なる神人と成られたので、「天成り、地定まりて、神聖其の中に生れます。之を、國常立尊と白しまつる」と、日本書紀に記されたのと、舊事紀に、「天成り、地定まりて、高天原に生れませる一神を、天讓日天狹霧國禪日國狹霧尊と號しまつる」とあるのと同じく、神人出生の祕事を傳へたので、古事記は更に、「伊邪那岐大御神が、竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原で、禊祓をなされ、左の

図表：人間身とミケツカミとの関係

全宇宙を統率する大宇宙の中心



祖神と主神

多田山公遺稿

まはば

「惠保婆、我が主に宣り給はく、我れ今汝を生みたり、總べての國をば汝に与へん。」

此の本文に依りて、惠保婆とは祖神にして、我が主たる基督を生み給ひし靈なること明なり「神の靈水の面を蔽へり。」と云へる靈は即、此の靈なる惠保婆にして零なり。

故に極大極小にして「之れを開けば六合を蔽ひ、之れを閉づれば蜜に蔵るる」ものにして、「一物在り、天地に先ちて存す」と云へる物なり。

「天地初判、一物在る虚中」と云へる物にして、虚にして、中外にあらず、有無にあらずなり。

一にあらず二にあらず、三四五等にあらずるなれば、零にして、〇にして、火にして、空虚なりと主たる教入来たりしところなり。

故に物ならざるの物なり、神ならざるの神なり、人無きの人なり、神無きの神なり、人ならざるの人なりとも云へるなり。之れを天御中主大御神（あまのみなかぬしのおほみかみ）とも天照大御神（あまてらすおほみかみ）とも天常立神（あめのとこたちのかみ）とも教へられたれども、日本古典には其の然ることを説示せず。

僅に別天神・獨化之神・獨神隱身・一神・等の名を記したるのみ。

故に之れを知らんと欲せば、唯一専念に神名を奉称して神命を仰ぎ、神界眞理の大道に立ちて體得せざるべからず。

唯一専念神名奉称
神人來示 八神殿

神ならざる神とは〇にして零なる極大極小なれば、總べてにして、計算すること能はざる無なり。

「莫羅圓」と古典に載せたる圓なり。

此の圓は「マト」と訓みて「的」「基準」「標識」等の文字言語を充實するべきを俾べく、「高

圓（たかまと）」「的形（まとかた）」等の語と等しくして、「閻魔天（やま）」「摩耶（まや）」「聖母（まりや）」等と同義なり。之れを「親（おや）」とも「祖（おや）」とも「天神（あまつかみ）」とも「天祖（あめのみおや）」とも傳へたる「祖神（みおやのかみ）」なりとなす。

祖神は國を築き神をも生み給ふなれば、神の外なる神なりとは云へるなり。

「神は宇宙を造り給ふ」とも「宇宙の外なる神」とも云へるは此の祖神なれば「マト」にして「マトカタ」・「タカマト」・「サヤギナキヒ」・「アメノミオヤ」・「オヤ」・「アマツカミ」・「マリヤ」・「ヤシマ」・「マヤ」・「アメノトコタチノカミ」・「アメノミナカヌシノカミ」・「アマテラススメオホミカミ」・「エホバ」等にして、支那人が「神」と描きたるところなり。

「ミコト」なり「ミチ」なり

「イノチ」にして「命」・「天命」・「運」・「大道」等と書く、三義三途なれば「尊」の一

字を以つて「ミコト」と訓ましたるなり。

従つて、此の「尊」とは神ならざるの神なり。

然れども、「命」とは異にして、○ならざるの□なり。

□なりとは「クニ」にして怪奇の存在なりとの義なり。

相（すがた）無くして相を現したりとの義なり。

○は相無く音無きを示し、□は相無く音無きものの相を示すことを教へたるなり。

ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリ。

以上

昭和十一年十月三日

◇

○も□も共に祖神なる火なれども、○は圓にして□は方なり。

方とは「スガタ」なれば「形無きの形なり」、「法則無きの法則なり」、「無きにはあらざるなり」との義なり。

無きにはあらざるものの結び結ひたれば「ヒカリ」なりき。

「神、光あれと云ひ給ひければ乃光有りき」と云へる「○」なる「ヒ」なり「ヒノカミ」なり。

り。

「日神（ひのかみ）」なり。

即回なるなり。

一にして二にして三にして四にして五なる「ヒフミヨイ」にして「神代（かみよ）」にして「神代五代（かみよいつよ）」にして「カミカカリ」なり。

「神二つの光を與へ給ふ」とあるは二回にして水（みづ）にして「天なる水と地なる水とに別ち給ふ」と云へる天地の日なり。

「天譲日天狭霧国禪日国狭霧尊」と傳へたる神なり。

一神にして二神にして「ヒ」にして「ヒト」にして「カミ」にして「アメツチミスマルミタマノカミ」にして「アメツチノカミ」にして「二柱御祖神（ふたはしらみおやのかみ）」にして、

「天御柱國御柱」にして「八尋殿（やひろどの）」にして「八神（やはしら）」にして「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神」にてましますなり。

之れを「アマノヲネコ」とも「シホツテノヲネコ」とも「シホ

コヲロコヲロ」とも「美斗能麻具波比」とも教へたまへる産神にして、「高皇産靈神」にして

「神皇産靈神」にして「神魂高魂生魂足魂玉留魂大宮女御饌津神辭代主」にして「大直靈神」にてましますなれば、「ヤタノカガミ・ムラクモノカムツルギ・ヤサカニノマガタマ」にして

「オキツカガミヘツカガミヤツカノツルギイクミタマタルミタマカカリカヘルミタマタルミタマチカヘシノタマヲロチノヒレハチノヒレクサクサノモノノヒレ」なる「ニギハヤヒノミコト」にして「一二三四五六七八九十百千萬」にして「八百萬魂神」にてましますなり。

以上

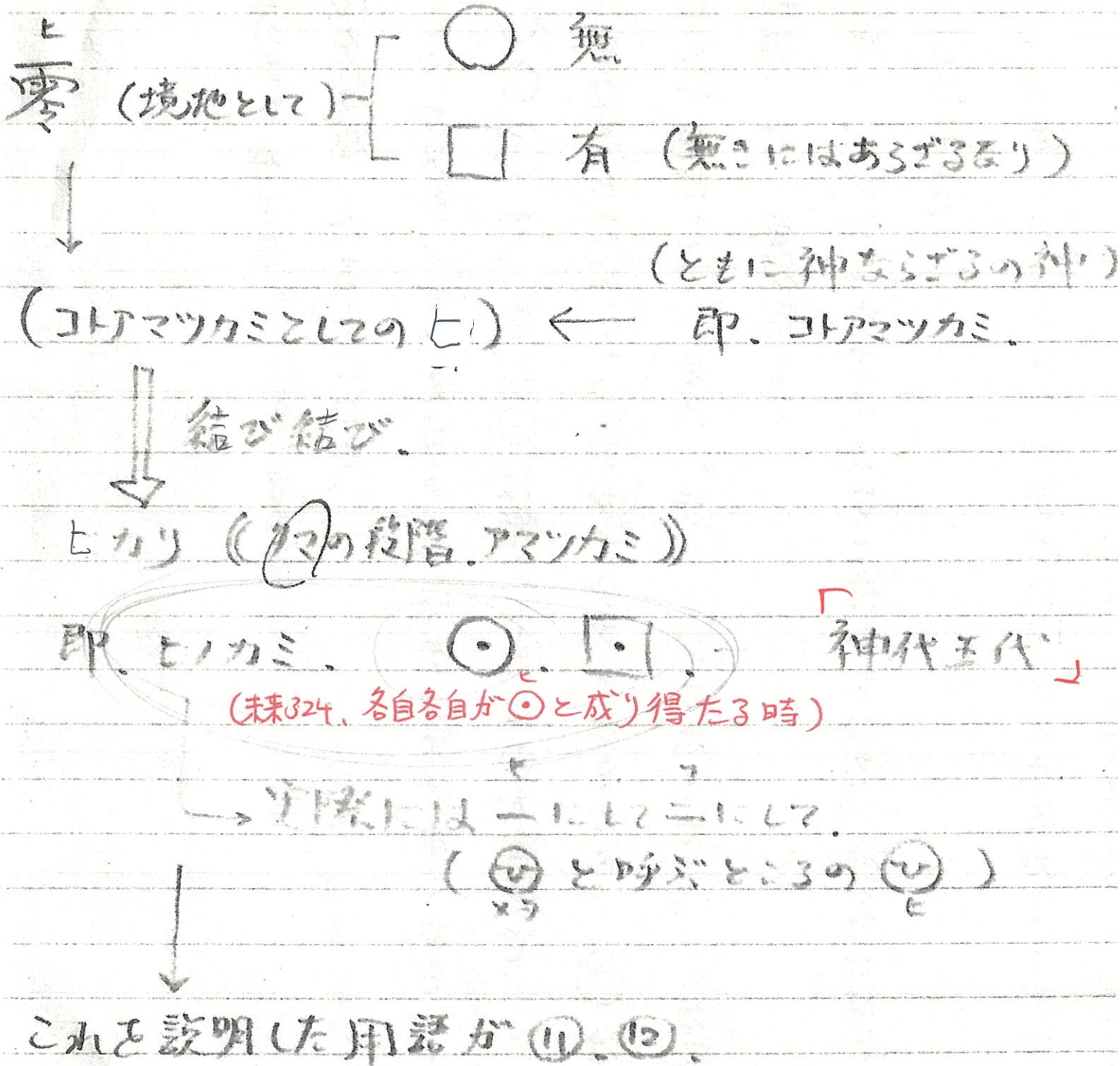
昭和十一年十月三日夜半

之れを二柱御祖神の神挂と称して生産の祕事なり。

生産は人の最速とするところにして、人を産むを其の極となすなり。

二柱みおやのかみのたておきしつばのいふみいづもこのことかみぞしと云ふ。

祖神と主神 2頁目の説明



解 (神代七代... コアマツカミの領域まで及んだ、作用力の表現、 $\bigcirc$
 親 (神代五代... アマツカミの領域における、実体としての表現、 $\bigcirc \cdot$)

此の胎中に養ひ育てられたる神を第廿五神界の主神と称へて、日本古典には「天津彦彦火瓊瓊杵尊」と伝へたのであり、その御親神天忍穗耳命とは廿四の零神ヒノカミにましますので葦原中国アシハラノクニには御降臨遊ばされなかつたことが判明するのである。が、之レは「神代紀」の伝へだから人間身の事でも人間世界の数理でもない。人間身が既に忘れ、未知らざる奇振岳クシフルタケの秘事で、「零神ヒノカミ」としての御生誕である。

零ヒの神の御生誕を、古事記はその巻頭に隱身の神として、日本書紀は純男として、旧事本紀は天祖として、各々僅に数言を載せ、次ぎには、魂タマの神の御事蹟が記されてある。ところで、現在の古典は、まことに不幸にして、神界の事理を知らざる俗学者に瀆され、零ヒの神と魂タマの神と身の神と身魂ミタマの神と人畜動植鉉物等との判別も無い雑糅混淆の記載と成つてしまつた。為に、後学は全く津梁を失ひ五里霧中に彷徨するの悲嘆を繰返して居る。此の霧を掃ふに「米」の秘事が有る。それを、瓊瓊杵尊隱身の神伝と教へられたのが現存行事の「散米の祓」である。

祓去り祓来れば、あや奇しくも「天成り地定り、高天原は成り成る。」「その一点を仰げば、神聖国常立尊である」とは日本書紀の伝である。「その一神とは、天アメノミコサ 祖天譲日天狭霧国禪日国狭霧尊である」とは旧事本紀の伝である。「その時の神は、隱身カクリミ天之御中主神である」とは古事記の伝である。「並び給ふ神としてはましまさねば、天照大神と称へまつるのである」とは古語拾遺の伝である。卒然として之等各々を読めば各々別々の如くである。

けれども、是くの如くそれぞれが皆共に「一」である。日本語では等しく之を「ヒ」と称へて有るかぎり在らんかぎり一切合切との意である。乃、「大宇宙」である。人天万類は各自各自に大宇宙としての起伏波瀾である。

ことを明らめ得たる時、各自各自分分個個としての入天万類がそのまま、身魂ミタマであり魂タマであり零ヒである事實を顕影して一円光明の◎と成る。

珍重珍重。如是の「否^ヒ」。如如起滅。怪奇至極。故に呼んで「神^{シン}」となす。之は支那人の「无方」と云ひ「陰陽不測」と称するところの「神^{シン}」である。

先聖の教へ遺された大道に荊棘を植ゑ牆壁を築いて神道は民族信仰だなどと呟く。それだから偏狭固陋で役に立たない。

未来324頁より

緯対 — 神界^{カミヨ} (空間) } 神代
経行 — 神代^{カミヨ} (時間)

この「界」と「代」は当て字。
大切なのは、「カミヨ」というコトワズ。(無宇宙)

「^{カミヨ}神代^{カミ}の神」は、「無宇宙の^{ヒノカミ}零の神」の意味。

同頁. 3行目.

意訳 (人間が無宇宙のヒノカミと同じ
境地に立ったら. その時には、)

「各自各自が^ヒ◎と成り立つ時. 〜」

以下は. その境地を表現した文。

秘稿「祖神と主神」に即して言えば、

^{ヒノカミ}◎としての. 神代五代の境地である。

→ 途中は文学的表現で、

実際の述語は、末尾の「^{カミ}十で. (其に) ^ヒーである」である。

(2020.10.20. 追記)

「イハ」と「ハカ」「
その二、ヒノキノマバシラ」(一)

「柱」とは、^{アメノミハシラ}「天御柱・^{クニノミハシラ}国御柱」即ち「中心の一点」の
象徴である。(合本327頁、率78頁、ほか参照)

その一点とは「すべてのものの根本種子」であり、また
「分割することのできない^ヒ日」であり、これを象形としては

「」と描く。何故なら、その一点とは常に「^メ陰と^ヨ陽と

の二つであって、そのままに一つ」という性質を備えた
実在だからである。(合本328頁、率78頁、ほか参照)

これを別の^{コトバ}詞では「カミ」とも呼ぶが、無論、ここで言う
「カミ」とは「極」のことである。即ち、「小の極」としては
「万物がそこから^ニ出でてそこへ^ニ帰るところの唯一点」のこと
あり、「大の極」としては「全宇宙神(全体神)」のことだ。

(合本328、332、336頁、参照)

両者は、人間の通常の認識能力を^こ超えたところで一致
しているのである。

「イハ」と「ハカ」

その三

「ヒノキノマバシラ」(ニ)

「ヒノキノマバシラ」はそもそも「中心」の象徴である。

そして、実際には「自己の中心」も「家の中心」も「国の中心」も「全宇宙の中心」も、すべては「同一の中心」なのだ。だが、我々人間の通常の認識能力では、それらの諸中心を「^{おのれの}各々別個の中心」としてしか認識することができない。

そこで、我々は「中心」の象徴である「ヒノキノマバシラ」を
^{いつ} ^{まつ} 齋き祀ることによって（このマバシラを「タヨリ」として）
単なる「自己の中心」から「家の中心」へと、また「国の中心」
へと、さらには「全宇宙の中心」へと認識を拡大してゆく
のである。

『すべての中心は同一の中心である』という高次の認識
に到達することができれば、我々は自分自身を『カミとして
の我である』と自覚することも、
^{また} できるようになる。



未来 第十九号

山裡清明一塵不起。
大海平等一波不立。

「オホミソラ」は、すみすみて、すみきりたれば、「スメミマノミコト」の「ミヅノミアラカ」とたたへ、と描くべき六面晃耀の零海である。

「オホウミ」は、そこひしらねば、なみかぜ立たずして、「ワタツミ」の「イロコノミヤ」と呼び、と描くべき球域である。

如是の零境と、如是の球域とは、共に、神聖の生ます胎であり、神聖の治らすである。

日本民族は、之れを称へて、「家」となし、又、「國」となす。私は今、此の家であるところの國の起源をたづねたい。

家と呼び、國と称するも、共に、その主は「人間身」である。人間身を、日本語では、「ヒト」と呼ぶ。それを、数理観に因る名称としては、その内容が、ヒフミヨイムナヤコトで、九魂統一・十魂尊貴の身だとの略称であり、「日」を種子として、或期間或区域に「止」る上からは、「日止」の義であり、その「ヒト」の妙用

を指しては、「火人」の義であり、男女の合体たる上からは、「人」の義で、すべて四義が有る。

此の名称の教ふる如く、人間身は、何如にも怪奇異霊の神魔殿とも呼ぶべきである。此のやうな人間身と等しく、神魔雜糅神魔交錯の混合体で、一日一時と雖も、崩壊流失散乱亡滅しないのが不思議な程だからとて、「國家」をば「クニ」と呼ぶ。その「ク」は「クシビ」で、怪奇異霊の義であり、その「ニ」は「ニギビ」で、調和統一したるものとの義である。故に、「クニ」とは、何如にも不思議なる群聚魂・群我（国土山川草木人畜等）が、好くもマア、調和を保ち統一して居るワイ、と驚嘆讚美の意を籠めた言葉である。

是くの如き人間身が、五十、八十、百歳の寿を保ち、國家が、幾百千載と持続するのは、或は寧ろ不思議かも知れぬ。「ヒト」は此のやうな「クニ」を何のやうにして築いたか。

現在の如き國家成立以前に、「クニ」と呼ぶことはなく、「イヘ」が在っただけである。

「イヘ」の「イ」は正しくて上升する義であり、「ヘ」とは住み処で、宿で、物を産出する「トコロ」だから「胎」である。それ故に、「イヘ」とは、安息所で、發展上升すべき胎との義である。人は此ここに休息し安養し、此こより発足し伸展する。その発足し伸展したる暁には、広き地域を必要とし、幾十百千万八百万と展開しては、之れが統治統率に複雑なる組織をも必要とするに到る。

「ヒト」が「イヘ」を立てた時には、自身を省察して、その組織構成を直に家に移し家憲を立てる。その如く、國はまた、家憲を移して國憲を立てる。そのやうな順序で、人の集團は、その大小広狭に関はらず、必や。人自体の組織構成を基準にして運営する。人間心身の組織構成は、固より宇宙の事理そのままだから、集團を成す時、此の事理に忠実ならば、その運営は、必や円滑で、健全なる箇人そのままの集團が成り立つ。

私どもは、どうか健全なる「ヒト」で、健全なる「イヘ」・「クニ」を築きたい。

「イヘ」には、先づ「ヒト」が在る。その「ヒト」は、必、男子と女子とでなければならぬ。男子と女子とが単位となつて、はじめて「イヘ」の存続が成り立つ。その男子は男子であり、女子は女子であつて、決して同一でも同等でもない。肉体組織も異れば、精神活動も、その領域を別にして居る。それで、古典には、「女言」に先立ちしに由りて良はず」との教へが載せてある。ところが、不思議に「女」は先走つて言を出す。「此の木の實を食ふな」と、神の戒めた時にも、「その木の實を食へ」と、女が男をソソノカシて居る。すると、そのまた男は、女の詞に引かれて、「木の實を食つた」と云ふ。之れはユダヤの古典だが、日本の古典は、男女の間で間違つた行為が有つたと気付いた時、「共に天神の御教を仰いて」直に行ひ直した。とある。その天神の御教が、この「女言」に先出ちしに由りて良はず」更に「改めて為よ」とあるのです。初にはユダヤ風に女が先に口を出して悪い結果になつたから、改めて神の命せを仰いたのである。本来、「カミ」と共に在る「ヒト」が、「カミ」を忘れて、我儘勝手な行ひをする。そこに根本的の過誤がある。此の「アヤマチ」を為さないようにと、

「家」を建てる場合には、必先づ

「柱」を立てる。それについて立柱祭をする。

此の「柱」とは、「カミ」で、「天御柱」で、「國御柱」で、「心御柱」で、「宇宙万有一切合切の種子」である。此の「種子」は、「最大最小」で、「日」と呼ばれる。何故に、それが判るか云へば、

茲に、各人各自が各人各自に自己を省察して、その来由するところを尋ねる。尋ね尋ねて、分割しまた分割し、分割し尽したとする。すると、それは、小の極で、小宇宙としての自己の窮極である。窮極であるべきことが必

然である。更にまた、一切を累積し累積する。然うして、累積し尽したとする。と、それは大の極で、全宇宙なる窮極である。

小としても、大としても、窮極と云ふのは唯一つであるべきことが、また必然である。すると、その窮極とは、大と小の一致点である。それは、「大と小の二つなる一つ」で、また「一つでもなく二つでもなくて」、重無尽無量に展開するので、之れを、「カミ」は、「ミカガミ」ぞと教へ給ふ。「ミカガミ」とは、相互に相見るもので、相合ふもので、二にして一、一にして二、「ヒト」にして男子であり、また女子であり、男子は男子のままに男女の合体であり、女子は女子のままに男女の合体であり、人間身は人間身のままに陰と陽との合体であり、乾坤、雌雄、等と、そのそれぞれの名称は別別でも、そのそれぞれは、すべて、乾坤、雌雄、等と、相互に相互の合体だから、男と云ひ女と呼ぶとも、その「種子」は、分割けることの出来ぬ「ヒ」である。それを象形で ☺ と描く。則、天地の合体で、天有るが故に地有り、地有るが故に天有り、分割すべからずして、自天は天であり、地は地であり、乾坤、雌雄、男女、等、皆また、此の事理を等しくして、妙相を具へ妙用を現はす。此くの如く、大と小の一致点なる ☺ が、すべてのものの根本種子である。それを、別の詞では、「カミ」と呼ぶ。「天御柱」なる「カミ」であり、「國御柱」なる「カミ」であり、「心御柱」なる「カミ」であり、一切切の「タネ」としての「柱」である。

人の身にては、その「柱」を、その家に、

「ヒノキノマバシラ」として齋き祀る。そこで、その家、その人の中心位置が定まる。否。「ヒノキノマバシラ」を奉斎奉祀することに因って定まるのではなく、人が肉眼的に認め得るやうにと、「檜の真柱」を立てて

「御霊代」^{ミヒシロ}となし、日夜奉拝しつつ、自己の中心より、家の中心、郷土の中心、国家の中心、全人類世界の中心、太陽系の中心、各界、全宇宙の中心と、相互に往き交ふ「タヨリ」となすのである。

「ヒノキノマバシラ」は即、最大最小の「カミ」で、人の「柱」^{カミ}で、家の「柱」^{カミ}で、郷土の「柱」^{カミ}で、國の「柱」^{カミ}で、天地の「柱」^{カミ}で、一切合切を統べ治らす「モノ」であり、「ココロ」であり、「主」^シである。それ故に、人間身心行蔵進止の法則基準となるのである。

「ヒノキノマバシラ」を齋き祀れば、我は、常時不斷に「カミ」と与に住み、「カミ」と与に思ひ、「カミ」と与に語り、「カミ」と与に行ひつつあることが、自分自身にハッキリするとともに、神としての我である自覚を得、神たる言論行為を現はすが故に、一切の魔障災害は近づくことが出来ない。起ることがない。身安く、家安く、郷土安く、國安く、上天下地平和安樂で、五穀菜果は豊熟して倉庫に充滿するのである。敢へて求め願ふことを要せずして、程程に足り充つるのである。

「ヒノキノマバシラ」を立てては、先づ自己の幸・魂・奇・魂を齋る。自己自己の御魂を齋るのだから、自己の家系から出発して、鎮守神、産土神より、最大最小の「カミ」に及ぶ。故に、

「チチ、ハハ、ミオヤ、ミオヤ、ナベテノ、ヒトビト、ワガ、サキノヨノ、チチ、ハハ、ミオヤ、ミオヤ、ワレニ、ユカリアル、ナベテノ、ヒトビト、ミナトモニ、サトリサトル。サトリサトレバ、アマネクヒトツナリ。アマテラスオホミカミト、タタヘマツルナリ。ツキヨミノミコトト、タタヘマツルナリ。タケハヤスサノヲノミコトニテ、マシマスナリ。オホヤマトスメラギミニテ、マシマスナリ。（カミ）トコソハ、タタヘマツルナレ。」

と、称辞白しまつるのである。

それで、自己^{ミツカラ}自己^{ミツカラ}をはじめ、縁由^{ユカリ}ある一切、（厳密に言へば、一切は縁由有るものなのだから、）仮に、縁由の有る無しにかかはらずと白しませう。その全宇宙一切合切をして、本来の妙象妙用を顕現せしむるので、世に謂ふところの、僧侶、牧師、神職、等の祭儀行事をば、必要としないのである。則、

「ヒノキノマバシラ」を立てるのは、家庭祭祀の根本義で、我と我が身魂を齋り、我が父母祖先有縁無縁有情非情一切合切をして、神魔同凡の天御鏡^{アマノミカガミ}たる事理を明ならしむる日神事^{ヒノカミワザ}で、火神神事^{ヒノカミノカミワザ}で、「ミソギ」と称するのである。

是くの如き「ミソギ」に因つて、身を脩め、家を齊へ、國を治め、天地を平安ならしむるのが、祖神^{ミオヤノカミ}の垂示^{ミラシヘ}である。仍つて、私どもは、世の、神職、僧侶、牧師、等にも、悉皆、脩禊を科せねばならぬ。

「ミソギ」に因つて、家（國）を立てたことは、各國古典の伝ふところではあるが、今は唯、我が古典中、古事記の上巻だけで、その例証を挙げるとしても、

第一が、天地初^{アメツチトヒラケタルトキ}発。

第二が、萌騰^{モエテナリマセルカミ}而成神。

第三、國常立神^{クニトコタチノカミ}。

第四、修理固成^{スリカタメナスナル}、天沼矛^{アメノヌボコ}。

第五、陰陽合^{アメノミハシラクニノミハシラ}体。

第六、悔改^{○ノカミワザ}。

第七、國嶋産出^{クニウミタマフ}。

○

これで、思量の範圍に於ける一応の説明は出来たと云へる。

然り。

然れども、

這箇非思量底は奈何。^{ドウカ}

○

一致点で、分歧点、境界線

○

—— だとは、道反大神で、塞坐黄泉戸大神で、黄泉比良坂の一線で、二柱御祖神が、相互に、

「愛しき我が那勢命、愛しき我が那邇妹命」と愛でつつ、相逢ひ相別れたる○で、顕界神域と、幽界魔境との一

致点であり、分歧点であり、境界線である。○は、また直に「如是」全宇宙で、⊕^球である。

此の⊕^球を「ハカ」と呼んで、生死を超越したる「イへ」である。

「ハカ」の「ハ」は、「葉國」の「ハ」で、分れ出づる音義であり、その「カ」は、晃耀赫灼との音義だから、

此の二音を合せては、光り輝く魂との義である。

かくて、幽界魔境もまた顕界神域に外ならず。此の故に、死者を齋ること、また、生者に仕へ、生者を齋るが

如くして、同殿俱床、日夜席を共にするのである。

天界地底在一几

是れが、私どもの「墓」^{ハカ}で、生死一貫の誓約で、神魔同凡の天御鏡で、神人長舞の宮殿^{イハ}で、「ミアラカ」と呼ぶ。「イヘ」は「イヘ」でも、「家」の「イヘ」とは大に異なる。と云ふのは、対立を越え、上下内外を包括して居るのだから、障壁も無ければ国境も無い。坦坦たる地上。各人各自は、各人各自に、その好むところを「イヘ」として、自他共に侵犯妨害することなく、さるることなく、相互に相互の幸福を享受しつつ、天地一貫、顯幽一途、洋洋として流行転換するのである。是くの如き境涯は、正誠善美の極で、また、邪惡醜陋の極で、

大正にして大邪、

大惡にして大善、

大美にして大醜、

命^ナづけんとするも、人間世界には、その詞が無い。然れども、その名が無ければ、人は、之れを忘れ、之れを想ひ出すことすらなくなる。先聖は、此の衆生を憐むが故に、如是^{カクゴトキ}全宇宙神に命^ナづけて、

「カミ」なりと教へ給へるなり。

「カミ」とは、人間的に云ふところの「善惡美醜正邪曲直」の義である。けれども、「カミ」自体としては、人間心身の思考するが如きではなく、太陽で太陰で、乾で坤で、天で地で、上で下で、高で卑で、男で女で、凹で凸で、如是^{ニヨゼ}の◎である。

が、然う云ったところで、世人^{ヒトビト}には、サツパリ、チンプンカンプンだから、「全智全能の神」などと教へて来られた。之れは、先聖の大慈悲心である。

全宇宙神と云ふのは、這箇^{コト}の現象世界であり、この現象世界は、そのまま、這箇^{コト}の本体神である。

みくに
天皇國で云ふところの「陵墓」はか

こは、現象世界を解き去り割き
分つたのだから、空で、無で、
物を止めず、跡を遺さぬのが本
我である。

宇宙の外に解けて無くなる

が、本来「死者の願」である。

さうして、「無」(宇宙の外)
と「有」(宇宙)との一致点にし
て、はじめて「カミ」(天地の
仲)(神魔同凡の㊦)を見るので
める。

全宇宙を假に描けば、㊦で、

則、「カミ」である。

判り易く形象を借りて云ふな
らば、「一圓鏡」であらうし、
「一音響」でもあらう。
それは、人間的身心の明らめ
難き○である。

此の○と化ることが、「死者の

願ひ」で、死者の往くべきとこ
ろで、決して、極楽(高天原)で
も地獄(黄泉國)でもない。
如是の「極」である。

「極」には生死が無い。

死者を導きつつ、死生無き
「極」(神界)に入らしむのが「死
者の齋り」で、此の齋事まつりが子孫

縁類の任務つとめである。

今は、説明の便宜で、「死者を
神界に誘導する」と云つたが、
事実としては、「消散滅却」の
後に、新しき㊦くにを築くので、そ
のまた、消散滅却と云ふのも、
人間の不備な詞とする假の説明
にすぎない。

形象を借りれば、○として、

その○が㊦なる内容の種子たねであ
ることを明にし、更に、種子で
ある㊦に由つて新しき㊦くにと成
し、新しき㊦と成るのである。
その累積したる人間世界で云
ふならば、既に廃れたる旧邦を
解いて、更に新邦を建てるので
ある。

その解くのに、完全に、元の
元の大元に帰らせるので、種子
の種子の大元の種子である㊦を
明にし、如是の㊦のままなる㊦
とする。

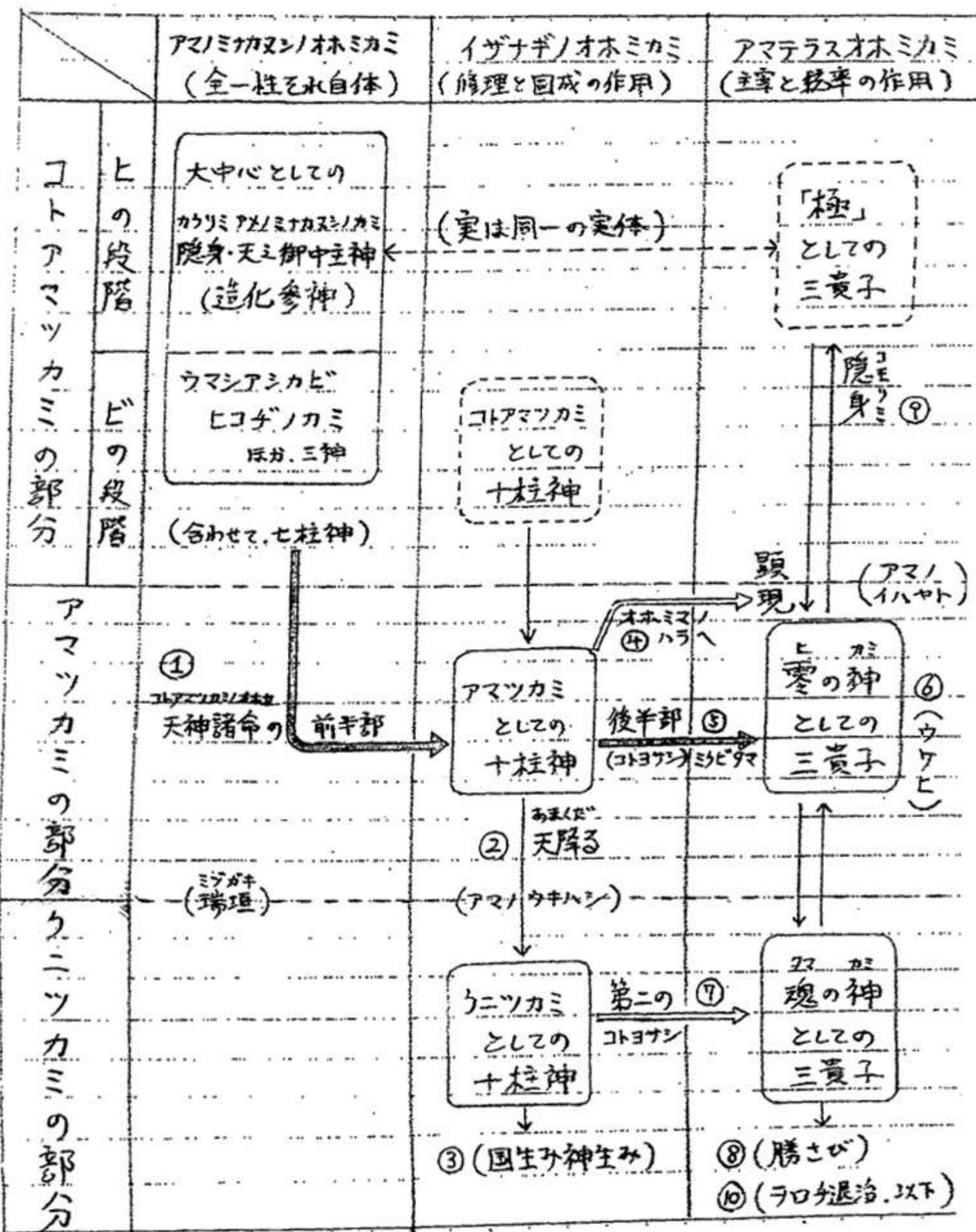
此の場合に、○は
アマノミナカヌシノオホミカミ
で、㊦は スメミマノ
ミコトにてましますのだと稱へ
て來たのである。

オホミカミ コトアマツカミノオホセ
図表：大御神と天神諸命

No.

7

Page



図表1. 古事記登場順の神名表

No.	神名	カミ	備考
1	天之御中主神	↑ 「トアマツカミ」 ↓	アマノミナカミノ オホミカミ は、 こちら側に重点を 置いた神名。
2	高御産巢日神		
3	神産巢日神 ヒ		
4	宇摩志阿斯訶備比古遲神		
5	天之常立神		
6	国之常立神		
7	豊雲野神 ヒ		
8	宇比地邇神	↑ 「アマツカミ」 ↓	イザナギノオホミカミ は、この十柱神に 重点を置いた神名。
9	須比智邇神		
10	角杵神		
11	治杵神		
12	意富斗能地神		
13	大斗乃辨神		
14	於母陀流神		
15	阿夜訶志古泥神		
16	伊邪那岐神		
17	伊邪那美神		
18	伊邪那岐命	↑ 「クニツカミ」 ↓	(二柱御祖神)
19	伊邪那美命		
20	大事忍男神		
59	豊宇氣毘売神		No.20~59.の40神は、 「神生み」で生まれた神々。

三日月、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱御祖神

タマ

アマツカミ
オホセ
天神
諸命

アマ
(天)

無宇宙

↑
瑞垣

↓
宇宙

(国)
クニ

< 「ヒ」の存在様式の三段階、まとめ >

() 内は「言霊の幸」の頁数、() 内は「修験講義録」の頁数。

1. 「^ヒ零の海」に充滿する「^ヒ零」そのもの。○
- { 純一不可分の^ヒ零 (90). 純一不可分の^ヒ靈 (80).
- ミムスヒ イクムスヒ クルムスヒ タマフメムスヒ
- 三産靈 (生産靈 足産靈 玉積産靈)
- ミ ミタマ
- 実としての御靈 (以上: 130).

これが ↓ ムスビムスビ
産靈産魂て

2. ○と○との複合体。◎ (136). ○ (168). ○ (72).
- { タマノヲ、ミヅホ、イノヲ、千變万化する^{ウシビ}靈魂、ヒの活用 (89)
- ヲテ ヌキ ラ メ × ×
- 経と緯 男と女 凸と凹と (91). タカミムスビとカムミムスビ (68).
- ミムスビ イクムスビ クルムスビ タマフメムスビ
- 三産魂 (生魂 足魂 玉留魂)
- ミ ミタマ
- 身としての御魂 (以上: 130). 三不可分の魂 (80).

その種子が ↓ 芽をますと <84>

3. 箇体としての成立。◎. □. □ (36). ○. ○ (78. 末)
- ヲテ ヌキ
- 経と緯との相交わりたるもの (91).
- ヒ ヒト
- ヒツ
- 不^ヒ一不^ヒ二不^ヒ三の玉 (生玉 足玉 玉留玉) <80>
- 人間身の上では 根本魂^{ナホヒ}直日 <132>

「火水」と「水火」の構造

マハシラの内容

ヒミナリ

此の「マ」	○ヒ	イキ	生	天(アメ)	火	上る	ヒ	△
彼の「マ」	●ツキ	シニ	死	地(ツチ)	水	下る	ミヅ	▽

神	宇	時間	凸	経	チチ	魂	陽	イザナギ
魔	宙	空間	凹	緯	ハハ	魄	陰	イザナミ

カムロギ	十カツクニ	無宇宙	日	體  ×7	相乖離する状態	天地否	火水未済	正位	△▽
カムロニ	ヨモツクニ	宇宙	月	活用	太平嘉悦の状態	地天泰	水火既済	逆位	▽△ ☒ ユ(湯)

多田流真柱神座・神名

カクリミ ウツシオミ

裏	裏	左	表	右	裏	左	表	右	裏	左	表	右	表
ヒノカミ (コトアマツカミ)	神産巢日神	極大極小極無極之火	神産巢日御祖命		天照皇大御神 <i>アノミオヤ アマテラスオホミカミ</i>	天祖 天照大御神	天照坐皇大御神 <i>ウラミアメノミナカヌシノカミ</i>	隱身天之御中主神	高御産巢日神		高御産巢日高木神	極大極小極無極之火	ヒノカミ (アマツカミ)
裏	裏	左	表	右	裏	左	表	右	裏	左	表	右	表
ヒノカミ (アマツカミ)	神産巢日御祖命		建速須佐之男命		天祖 伊邪那岐伊邪那美二柱御祖神 <i>アノミオヤ イザナミコトイザナミコトハシラフミオヤノカミ</i>	天照大御神			高御産巢日高木神	月夜見	月読命	月弓	タマノカミ (クニツカミ①)
裏	裏	左	表	右	裏	左	表	右	裏	左	表	右	表
ヒノカミ (アマツカミ)	天祖 伊邪那岐伊邪那美二柱御祖神 <i>命</i>		産土神 (ミノカミ)			沼田家御魂之常宮 (ミタマノカミ)	極大極小極無極之火		天祖 伊邪那岐伊邪那美二柱御祖神 <i>命</i>		鎮守神 (ミノカミ)		ミノカミ (クニツカミ②)

ミツガキ

←
五十年
ミノカミ

行人去來

（「編者註」ここに禊同人の文章がありますが、省略します。）

讀
七
色
光

人類の起源とか、民族の一元とか、多元とかいふことは、従来、世間の学説が、まことに多岐多端であり、
 族の移動もまた、なかなか複雑に思はれる。

今、前掲の「七色光」を読むに、民族の移動に依つて、人類文化の華が咲き、実の生る様子が面白く窺はれる。茲に、問題と思ふのは「海を照して寄り来る神」とは、移動し来れる民族であるか、それとも、自己の身ミタにあるか。人類学的に人種民族等の分類を認めるか、認めないか。考古学者が頻りに先人の遺骸、遺跡、遺物と探究して結論を求めつつあるのを待つか、それとも、宇宙構成の根本本体を科学的に究明し来るのを待つか。また、それ等に拘はること無く、「七色光裡。変転出沒。」の「真」を明にすれば、「天津宮事・天津宣事」の神ミカミは、顕現されるのか。

本誌第三号に、神音を挙げて、アアヒガテンジンユウアイコウだと云ひ、神数を掲げて、◎だと云ひ、それ
 かけたのは、・ ..::∴ ∙ ○ ∴ ◎ だとしてある。その音と数とが
 である如く、その象もまた、○であるとともに、七色光を現するのである。それ故に、自己中心の一点を把握
 し得れば、過去の過去際より、未来の未来際までを明にすること、掌上の物を探るよりも確実である。

古典に、「天地初発・天地剖割・天地初判・天地開闢」等と云へるものは、即、その暁なので、「天地と初発けたれば、神と魔ともまた剖れたる」ものである。

「剖れたり」とは、整理されたるもので、善悪、邪正、是非、曲直、美醜、明暗、のハッキリしたのである。神魔が剖割すれば、おのづから一几に在るので、それを描けば、

完 如是である。

その未剖れず不分ざるものとは、神魔雑糅なので、

⑤ 斯うでも書きませうか。

それとも、描くべきものでも書くべきものでもないのであらうか。

以上 昭和二十六年七月三十一日 山谷

◎

移し植ゑし芭蕉花咲く奇しくもき庭狭しと今年花咲く。

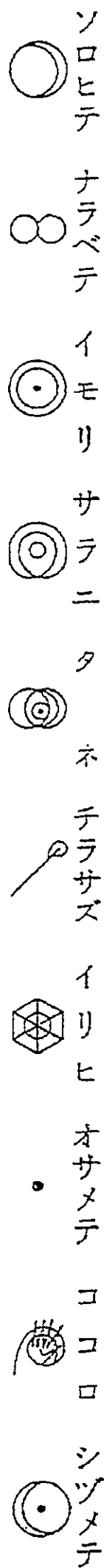
少名比古鏡の船の往き返る道遙にも我は来にけ。

右二首は「七色光」に題して山谷がよみたるなり。

「修理固成・天沼矛」の説明

「修理固成・天沼矛」の「修理固成」とは、「資料」を整理して、完全圓滿の箇體を築き成す「用」を現し、「天沼矛」とは、その「體（体）」を表現しており、さらに、資料整理の為、分解作業を司るのが「修理」で、「すり」と訓み、「総合し統一して造り上げる」ことを「固成」と表現し、「すりかためなす」と訓んでいます。（幸七七）

「天沼矛」は、「修理固成」の働きを発揮する「主体」であり、「修理固成」のやり方としては、以下の十種類の図とカタカナの説明で表されており、それにより、その神業を完全に成し遂げることができる、とされています。



また、「天沼矛（アマノヌホコ）」とは、「祓禊の神器」としての主神であり、「修理固成（スリカタメナス）」とは、「祓禊の言霊」としての司神である、としています。

そして、「天沼矛」の「印相」を以って「イーエツ、エーイツ」と大音声を発し、印相を以って空間を絶つと、その音声が「一線の光明」となって、「宇宙」を貫き通すとされています。

そして、この神業は、「気吹戸主の神業」とも言われ、「妖魔調伏の秘事」とも言われています。

そして、この「一線の光明を発する実体」は、「我」であるが、我の内に結ばれた「陰と陽」との「両極」がその活用を表したものであり、この神事の印相は、「天御柱・国御柱」を象徴し、合わせて「心之御柱」と称えまつり、「 神の御座」ともいわれます。(幸七八)

「神話」に、「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神が、いざなぎいざなみふたはしらのかな おのこゝろじま 淤能碁呂嶋に天沼矛を指し立てて国の中の天御柱となさ

れた」とありますが、この表現からすると、「国」とは、「外郭」で、「」と表し、「天御柱」とは、「中

心の一点」であると共に「国を統率した」ので、「 (ヒカリ)」と表現され、即ち、「 (ヒカリ)」

が「天御柱」であり、之はまた「国を統率した」ので、「国御柱」ともいえるのである、としています。

すなわち、この「 (ヒカリ)」は、「国御柱」であり、「天御柱」であり、合わせて「心之御柱」とも

いえるのであり、これが、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神の「神業」であり、之を「陰陽(メヲ)」と称え

るのである、としています。

㊦ (ヒカリ) をこのように表すのは、分割の極として、すべての物は、「二つ」ではあるが、それを構成する概念は、「陰」^メと「陽」^ヲの「二つの存在があること」を表現しているのであり、「極」は、「陰陽の合体したもの」である、ということの意味しているとしています。

そして、「㊦ (ヒカリ)」を日神とも称え、日とは、二つの光で、「㊦ (メヲ)」とも呼ばれる㊦^ヒが、「神人産出の胎」である、としています。

語句を補って、次のように解釈した方がよいと思う。

『イザナギイザナミが共に生んだのは 14 島・35 神である。

それは、特別の境地に到達してみれば (^{アマノハ}天地と割割きたる時)

(「このまゝこのまゝ高天原」と言うのと同じような意味で)

14 島はこのまゝ高天原たる境地である)

35 神はこのまゝ高天原統治の^{ミカミ}日神 (天照大御神) である。

このこと地はそれ自体としては ハルヒヒメ という外郭だが、

この境地に到達してみれば、それはまた ^{フタツノヒカリ} (フ) という中心

(即ち、35 神の親 本体 である イザナギイザナミ) である。

このイザナギイザナミを「二柱御祖神」と称する時は、

こうした^{ミコウミ}生神の妙用^{ミハタキ}に着目してそう呼んでいるのである。

(みずから^ミ経と^スまり^ス緯となつて^ミ相交わり

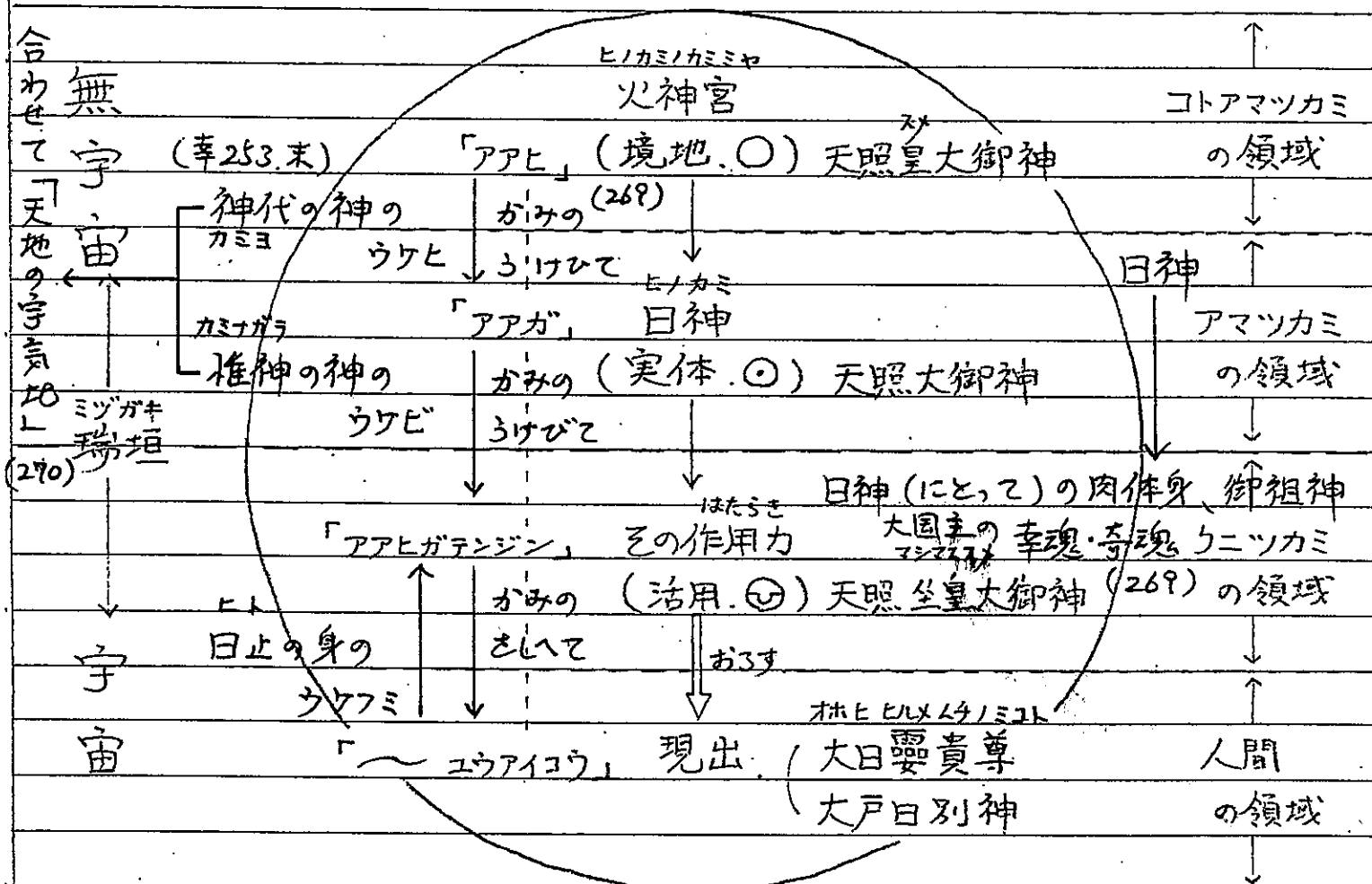
新たな^ミ宇宙を形成する作用のこと。

無宇宙から宇宙を産み出す作用を象徴する神名が

アマノミオヤ イザナギイザナミ フタハシラノミ である

十四字秘言と大宇宙概念図

ヒノカミ 是たふき



故人来教處世之秘

多田山公秘稿

大正の人道は人天萬類の生滅起伏するところなれば、大宇宙にして天神諸命にして天命にして命なり。

命とはミコトノリにしてミコトにしてノリゴトにしてコトにして、ミコトノリにしてアマツカミクニツカミにして、天地にして五十五にして百八にしてヒフミヨイムナヤコノタリヤモモチチミテリにしてヒトにしてフタハシラミオヤノカミなり。フタハシラミオヤノカミとは天津神國津神なれば天常立國常立にして伊邪那岐伊邪那美にして伊邪那岐命伊邪那美命二柱神なり。

天讀日天狹霧國禪日國狹霧尊と云へるも天なる神國なる神にして天成地定の曉なり。

天成地定とは創世紀に記したる二つの光にして、天の水と地の水とにして日なる二日なり。日を二日なりとは、日の字源

が傳ふるところにして、玉篇に④と載せて太陽の象形なりと云へるもの。

⑤とは④にして④にして〇或は□なる零が兩儀なりとの謂にして、宇宙ならざる宇宙が、宇宙を現はすには内に兩儀を含めるに依るとの黙示録なり。

察よ。

④は④の合体にして陰陽にして陰陽にあらずしてメなり。

メなりとは、孔(めど)にして芽(め)にして、④が陰なる如く凸も陰にして、兩陰の生産するところを宇宙なりとなすなり。之れを目なりとは、左右の二が合して一なり一にして二なり二にして一なり一なり不二なりとの教へにして、鼻と其の兩孔との如くにして、不二一を指示したるなり。

字言に陰は男女の生殖器なりと記せるものは陰陽共にメなりとの黙示録にして、左目を洗ひたまへば天照大御神なる日神出生し、右目を洗ひたまへば月讀命なる月神出生したりと日本神話の傳有る所以にして、太陽も太陰も共にメなりとの黙示録なり。

アウヲ。

故人来教處世之秘(二)

多田山公秘稿

放縱の人は小節を顧みず。然れども時に大業を建つ。

常人は見て非常識なりと貶し、低能児なりと嗤ひ、單純なりと排斥することあれども、人類の常識などとは必竟、紙屑の如きもののみ。

希くば常時不斷に神命を奉戴して世界人類平和嘉悦の聯邦樂土を現成せんことを。

時は今神の稜威の雄走りて我が行く道を射照り透らす。

阿知米。

獲麟の墨を得たれば、茲に之の短文を記して十有五年の将来を期す。

阿知米阿知米阿知米阿知米阿知米。

秘鍵今忽然として天より賜はる。

十有五年とは數なり。而して汝が大業成るべきの時なり。

持つて居る。で、先づ最初に此の音を出す。すると、現在の自分が、どれだけの力を持つて居るかがはつきりと其の音聲の上に現はれる。續けて又出す。連續して出して居ると、次第次第に強くなり、更に正しく美しく、威嚴を加へて来る。發して發して止まざれば、やがて、肉體と精神とが完全に統一して、凝止結晶、金剛不壞の神身を築き成すに到る。

第二の「エ」は、イとは反對に上下の齒を離して、舌を下げ氣味にせねば發し得ず、横に開いて廣がるのである。が、その廣さには限度が有る。横に並行の二線を引き、中央を縦の一線で劃つたのは、此の意味で、區劃を示し、分限を教へて居る。此の縦の一線を畔と呼びて、斯く在るべきものを斯くあらしむる軌範を教へられたのである。エは「ア」の作用を合はん意味を持つ。

畔は吾なので、存りて在るもので、結び止めたる靈であるから魂と呼ぶ。その結び止むるものを「ア」と稱して、玉の緒の別名である。それで、畔放と云つて蔽言に擧げた天津罪は、汚濁なる生活に慣れて居る人間世界では、それ程に思はぬでも、實は甚しき反逆で、神命冒瀆の大罪だからとて、其の第一に數へたのである。

畔として、吾としての軌範に制せられたる二は、天御柱・國御柱で、各自各自の位置分限を堅持して、相互に干犯冒瀆するが如きこと無きものである。従つて此の音には制御の力が強い。繰り返し繰り返して此の發聲を續けると、自己を引き締め他を警むる威嚴を増して来る。

そこで、正しく升る音のイを強く長く引いて、制御の音のエと連ねて切ると、イーエツと成る。小さなッは、上の音を切る符號であると共に蔽詞であるから、エの音義を更に強むるのである。さうして、之を繰返し繰返す。非常に強い善美正義の音であるから、自己を警醒し他を制御して正誠ならしめねば止まぬのである。従つて

イーエツ・エーイー・雄健雄謹の神言であり、修理固成の神言であり、アマノスホコの神言であり、

妖魔を調伏し病患苦惱を解除するので、「ハルヒヒメ」の祕事としての祓詞である。

一度之を發してから、此のイとエとの二音の順序を反對にして、エを長く引き、イを強く切ると、エーイッと成る。イーエッの發聲が、正義の音として妖類魔族を調伏摧破するのに對して、エーイッとは、正誠善美に導く音なので、善美正誠なるものは愈善美正誠の境を擴め、妖類魔族は悔悟して歸順するから、此の音義は、堅固大成で、濟度救出である。で、イーエッ、エーイッとは、祓の神徳を發揮する神言靈である。

神音であるから、「コトタマ」と清音に唱へる。若之を濁つて「コトダマ」と呼ぶならば、魔言と化る。一音は固より、半音でも忽にしてはならぬと云ふのは、斯のやうな爲である。

第三の「ホ」は、優れて美しいので、燃えて明なので、上升下降四維十表に雄走るので、雄大宏壯でもあり、輕快迅速でもある。

そこで、初にエーイッと發聲して正誠善美の身心を築きたる後に、此のホの音を出す。之を連ねてエーイッホとする。ところで、ホは一定區域から突き出で伸び擴がる音だから、強く力を入れればおのづから伸びる。で、伸ばして切る。すると、ホーッと成る。エーイッと引き締めて堅固に築き成したる身心を、ホーッと軽く強く明るく大きく速く美しく膨脹させ進出發展させる。従つて、エーイッ、ホーッとは、火之炫^{ホノカガビ}毘古^{ビコ}の祓言であると共に、大事忍男^{オホゴトオシラ}の壽詞で、事業建設の神徳を發揮するものであることがわかる。

第四の「サ」は、咲く花の意で、開落榮枯で、分出發散で、細^{クハシ}矛^ホ千足國^{コチタルノクニ}との音義である。細かく割れて開け行くので、此の音だけを連續して強く出すことは出來ぬ。

此の音は、軽く細かいのだから、先にエーイッの發聲で全身心を引き締めて後に出す。エーイッサ、エーイッ

サと連續すれば、輕快に進出する。サを伸ばして切れればサーッと成る。すると、輕いと云ふばかりでなく、稍強くなる。

エーイツ、サーツの發聲を繰返し繰返すと、輕く樂樂と進行するので、衆人統率の妙音であるからとて、古老は、「ササ」の名を、小竹・酒・等に附け、又、誘導催促の意に用ゐて居る。

以上、イ、エ、ホ、サ、四音の活用は、自己を堅固にして、活潑に進出しつつ他を統率し、事業を建設するものである。が、此ここに注意すべきことは、人の耳目に觸れて分り易いとか、華華しいとか云ふ部分は、體でなくて用である點なのである。多くの人が、修養に志す場合、誤つて其の働きだけを見て、偉いと驚き、それを手本に爲ようとする。けれども、それは手本に成るものではない。何ぜかと云ふに、外に現れたところは、ホーとかサーとか咲き散り、開き出でたる色香だけなので、一見その綺麗なのに眩惑させられ勝であるが、それは「木の花の阿摩比のみ」と歎かるるので、其の花を開かせ實を結ばせる本體としての、「石長比賣」の在ることに留意せねばならぬ。

その石長比賣と呼ばれる本體は、默默として富士山麓に埃を浴び雜草に埋もれて居る「萬古不變の道しるべ」である。此が、

第五の「ウ」と呼ばるる祕音なのである。此の祕音を、宇斗の眞佐頭良と稱するのは、音を成さざるの音との意で、外に發せざるものであるが、それでは判らぬから、開いた口を閉ぢて、その本體の活用を現はす。

「ウ」は結局、一切を閉ぢ結び繋ぎ止めたる「闇黒の土」で、一見愚蒙の如き土塊であると云ふことが出来る。則、萬物を養ひ育て、又、それを收藏する。で、

此の音を強く深く籠めて、身心を養ふ。

禊行事に、裏氣吹と稱するのは、主として、此の妙用を體得すべき方途を教ふるので、人間的の訓練から入つて、やがて神祕の零境を發かしむる祕事である。

「ウ」の音義に養はれつつ、次第次第に進み進みて、深く深く透徹したる時には、全く一點に凝結するので、人の能力では、「無」とか、「零」とか、「一」とか云ふより外はあるまい。

第十節

人の詞と云へば、口から出るものであるが、廣く音と呼ぶ上からは、全身心が音なのであり、更に、音を主として云へば、我としての全箇體は固より、全宇宙が、「一音響として、「カムルギカムルミ」「ラバシリヲコロブ」ので、天鳥船神事に、イーエツ、エーイッと唱へ、エーイッ、ホーッと唱へ、エーイッ、サーッと唱へる時は、全身體が、此の音聲と化して、此の音聲としての姿を現す。それを一一並べて記すことは非常に面白いのであるが、之は、圖として繪として畫かねばならぬから、別に發表することにする。で、今は、其の姿に到達する豫備的運動行爲としての形式の一端から概説します。

第一に、イーエツと發聲する爲に、直立せる身の左足を前左方斜に、爪先の向へる方向に、そのまま出して、右足と丁字形に一步開く。次に、發聲と共に、上體を前屈し、兩手を握り拳として、左足の方向に、肩幅だけの間隔を保ちて、前下方斜に強く突き出すのである。その強く突き出すとは、單に手とか腕とかだけではなくて、

全身を強く凝結させ、其の活用としての動作をするのである。

次ぎには、エーイッと發聲しつつ力を込めて腰を出来るだけ後ろに彎曲し、それに伴ひて肘をも引く。兩拳は、出した時と同じ間隔を保ちながら、肘と平に、略、和船の艫を漕ぐ要領で引く。その聲と動作とが完全に一致した時には、身心共に結晶して完全なる統一體に成る。そこで、其の統一したる身が、前に上體を伸して、初と同じやうにイーエツと發聲する。また、エーイッと發聲しつつ引く。

之を繰返し繰返して後、直立の姿勢に返りて、神の御名を奉稱しつつ振魂フルタマの行事を爲るのである。

次ぎには、ホーッの發聲と共に、右足と兩手とを前右方斜に出す。其の要領は、左の時と同様であるが、唯其の異なるのは、エーイッと引き締めた發聲の後に出すホーッなのであるから、引いた時のエーイッが有つて後に出すホーッであることに留意すべき點である。前にエーイッの音が無ければ、ホーッとのみ出しては悪い。

その「ホ」とは、既に述べた如く、著名なるものなりとの義で、顯れたるもので、明アカなるもので、秀ホで、火ホで、穗ホで、一定の區域を超越するもので、世の燈明臺で、衆庶の仰ぎて標識基準となすものでもあると共に、怖れ畏みて慄伏するものでもある。善惡美醜是非曲直共に世の常ならぬものである。さうして又、

燃ゆるものである。燃ゆるものとしては、水を化して湯と成し、水火既濟の妙用を現はし、劫火と成りては、萬類萬物を焚盡燒却するので、それは、地界魔境の主である。それで、生を象徵しては、△と作りて三角の頂點を上にし、死を象徵しては、▽と作りて頂點を下にするので、上升下向の別は有つても、共に一定區域を超越するもので、超越したるものである。

向上。向上。又、向上。

ことを明らめ得たる時、各自各自分分個個としての入天万類がそのまま、身魂であり魂であり零である事実を顕影して一円光明の○と成る。

「各自各自が○と成り得たる時、緯としては神界で経としては神代で経緯を合せては十で、共に「一」である。之を「日」であり「日神」であり「人」であると云ふ。その「人」とは、「日止」であり「火人」であることを教へて⊕と描き田とも◇とも品とも品とも日とも串とも申とも伝へて、☐たる示である。そうして又、☐☐☐☐と画するのは伏羲の所伝を敷衍したので「湯」であり「ユ」である。それを日本の古典には「中津瀬」と伝へて純真無垢の一点で中心であることを知らしめてある。之を「否なり」と呼ぶ。「そのやうなものの有るのではない」との義である。

珍重珍重。如是の「否」。如如起滅。怪奇至極。故に呼んで「神」となす。之は支那人の「无方」と云ひ「陰陽不測」と称するところの「神」である。

世界の学者中には此のやうな「神」は日本人云ふ所の「カミ」とはまるで別だと云ふものが多い。さうして、古典所伝の「零神」を忘れようとする。

先聖の教へ遺された大道に荆棘を植ゑ牆壁を築いて神道は民族信仰だなどと呟く。それだから偏狭固陋で役に立たない。

その現状を觀れば「何処へ行くのか」と愁へざるを得ない。世界人類は、太古の神伝を忘れて小我の邪見に繋縛せられ相互に闘争殺戮の惨劇を演じ来つたのである。魂の神としての天照大御神には、之を「かしこしと思召されて」天窟に挿し隠らせ給ふ。「天の下皆闇し」とて、八百万神は高御産巢日神の御子の御教へを仰ぎつつ「大

祓」を行はせられた。過去を祓ひ将来を祓ひ祓ひ祓ひて天窟戸の御前に太祝詞フトノリトゴト白し太幣帛フトミテクラ捧げまつり祭りまつれば、あや奇しくもあや畏くも高天原は明けて天照大御神には天地の在りのことごと御照し給ふ。

「あはれ・あなおもしろ・あなたのし・あなさやけ・おけ」

と、神の国の完成したのは「大祓」の神事に依るのである。それは「今日よりはじめて罪と云ふ罪はあらじ」と、式の祝詞に記された如く、「速佐須良比咩根国底国の秘神挂」である。之を「日本天皇三種神器の神徳なり」と拝みまつり畏みまつる。

第一節 完

第二節

数理観と言霊観とは、神象観と相待つて日本神道の扉を開く秘鍵である。之無くしては神秘を伝ふことも行ずることも出来ぬ。

それ故、難解な説明をも繰返したのである。けれども、之は

日本天皇の神伝なりと拝承しまつるので、微臣の分際としては、その深奥に入るを憚る。仍つて今は、出雲史に就き「日隅宮」の伝へを拝することとしよう。

ヒトミナハ。ウツソミノママ。スミスミテ。ヒスミノミヤニ。スムベカリケル。

伊邪那岐大御神が修理固成の神業を完成しては「日少宮に神留りまします」と伝へてある。此の宮は天津神の秘宮で、零神ヒノカミ トコミヤの常宮で、高天原とも称へて、無経無緯の高御座で、唯一点たる零ヒである。亦の名は大虚空で、

零海^{ヒノウミ}で、虚中で、虚天で、天忍穗耳命の神治らすところである。

その御児神は、その国を出でまして葦原中国をその国の如く治ろしめし給ふのだと神は教へ給ふ。色相を以つて之を称ふれば晃耀赫灼たる一円光であり、声音として之を聴けば琅琅として十方に遍き一音響であり、数としては零なる一である。

人類世界に神の与へたまへる瑞宝としての「数理」と「言霊」と「神象」とを「天浮橋」と「たより」で、我等凡愚の其のままに、神の国には升起得るのである。

此の「たより」とは、球と球との接触面で「点」である。此の「点」は、幾何学に「長さも無く幅も無くして位置のみ有る」と言ふが如きものではなく、其の位置としての長さも幅も有るのである。けれども、人間的に計算することは容易ではないから、普通学の範囲には置かぬのである。

球と球との接触面たる一点は、神の秘宮で、天津神と国津神との相交はるところで、成り余れる一点と成り合はざる一点との相回り相遇ひて国を生み成す「零^{トコロ}」である。零^{レイイチ}で一で、無より生ずる有としては火と呼び、無に帰する有としては日と称へ日少宮^{ヒノワカミヤ}と伝へ来つたのである。之を秘宮とか天浮橋とか称へまつることは、人間身として知り得ざる奇靈^{クシビ}であるからでもある。

古典に「天浮橋に立たして望み見たまふ」と伝へたる神は、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神としても、天忍穗耳命としても、いづれも共に、新しき国土を生み成し給はんと御準備遊ばさるる時なので、零^ヒの神が魂^{タマ}の神としての国土を生み成す時、魂の神が身の神としての国土を生み成す時、身の神が身魂^{ミタマ}の神としての国土を生み成す時、また、身魂の神が人の国を生み成し給ふ時、等と、次第次第に、精より粗に、清陽より重濁にと転化し、或

未来324頁より

緯^ヲ対 —— 神界^{カミヨ} (空間) } 神代
経^ヲ行 —— 神代^{カミヨ} (時間)

この「界」と「代」は当て字

大切なのは、「カミヨ」というコトヲマ、(無宇宙)

「^{カミヨ}神代^{カミ}の神」は、「無宇宙の^{ヒノカミ}零の神」の意味。

同頁、3行目。

意訳 (人間が無宇宙のヒノカミと同じ)
→ 境地に立ったら、その時には、

「各自各自が^ヒ◎と成り立ち時。へ」

以下は、その境地を表現した文。

秘稿「祖神と主神」に即して言えは、

^{ヒノカミ}

◎としての、神代五代の境地である。

→ 途中は文学的表現で、

実際の述語は、末尾の「^{カミ}十で、(其に)一^ヒである」である。

(2020.10.20.追記)

ある。

その伝へは幸にして古事記や日本書紀などに委しいから、人人は須らく熟読究明すべきである。

第七章 終

第八章 少彦の協力

「二にして三にして四にして五にして六にして七にして八にして九なれば十と呼ぶ」とは「宇宙は統一躰なり」との義で、数を以つてそれを説明したのである。それだから、之れを数理觀で宇宙觀で、また、人身觀だと云ふのである。

此の数の活用が神界をも、魔界をも現出するので、「鎮魂祭の糸結び」が行はれる。

魂の緒を結び結びて人は皆神とこそ成れ。日月隔てず。

日に夜にも結び留めたる君が魂。八代九重に仰ぎこそすれ。

高魂の神の御子に暴悪で何うにも教へやうの無い神が在られた。大穴牟遲神はそれを良く養ひ育てたために出雲国を完成して大国主神と成られた。

暴悪なものを制御しようとすれば、それにも増した暴悪な力を持たねばならぬ。その暴悪な力を翻して神業に随順する。

それは、「神と成りたる魔」であることを屢々繰返して述べたが、そのやうな神魔の協力に依つて人天万類を

「毒を毒にあらしむること」は、所謂「毒を以て毒を制する」のではなく、「毒を変じて薬と為す」ものである。それならば、どうして「毒が薬に変わる」だらうか。

それには、二つの道がある。その一つは、毒を毒のまま分量と時間と空間とに適應させる。然うすれば、毒も薬の役を為る。是れは所謂政治家と呼ばれるものの慣用手段である。他の一つは、それとまるで趣を別にしてゐる。

それは、神音と神象と神数との活用に依つて醜を美に悪を善に邪を正に轉換させるので、用ゐ方とか使ひ場所とか使用の時とかに關はるのではない。「神音を稱^{タタ}へ神象を画^エき神数を算^スむ」。すると、禍津^{マガツミ}昆と呼ぶところの醜惡邪曲が極底最下の火と化して根堅^{ネノカタスクニ}洲国を築成する。

そのさまを「大祓の祝詞」が僅ながらも伝へてある。その中の文章の一部と行事中に稱へる秘詞とは神音であり、行事中に画^{カク}するは神象であり、齋部の算^スむは神数である。さうしてその全部が行はれれば、瀬織津比咩・速開都比咩・氣吹戸主・速佐須良比咩の神座^{カミクラ}が成立する。それは則、日若宮^{ヒノワカミヤ}で、日隅宮^{ヒスミノミヤ}で、 $\odot$ である。

かしこしや。此れ是の極底最下の一線は、即是れ極大無限の一線。線にあらず面にあらず点にあらずるの点線面なればとて之を画いて「ヒ」となし之れを算^スんで「イ」となし之れを詠^{ウタ}ふて「ム」となす。

神界構成妖魔群。昨是今非術魂城。出沒浮沈三惡道。願望一夕冢間煙。

立ちのぼる煙の糸の結び来て立ち舞ふ姿神ながらかも。

天地の神の心を畏みて人の世何時も浦安くこそ。

此の図は

○並冠対立

である。然し又、

○嬰兒対

でもある。題は桜花であるが寓意であるから「逝く人」である。木花散比咩の神徳たる生産であると共に木花咲耶比咩の神徳で「山祇」と称へまつる「豊酒」である。

木花散比咩と木花咲耶比咩と山祇と豊酒とが等しく「逝く人」の義を示して居ることは日本民族死生観の教ふところである。「生死遷流如去来」の意である。古語では「ユク」と「クル」とを同じく往来の義に用ゐて居た如く。現今も九州地方で物を「ヤル」と云へば受くる意と遣はす意とに並用せらるる如く。生と死との境に立ちて此の世の死が彼の世の生であることを知るが如く。生即死死即生にして環の如くに端無き一円相裡の起伏往来たるのみで。必竟空と名づくるも神と名づくるも神と云ふも魔と呼ぶも共に仮の名で。我と彼と相對し天と地と相對し明と闇と相對する間の人間身を蟬脱したる暁には昭昭琅琅として○なることを悟証するので。河海の岸に立ちて水を眺むる時は水の岸なれども陸を見れば土の岸なる如く。「カミ」もまた前後左右上下を別つから木花咲耶比咩を前とすれば木花散比咩は後であり伊邪那美は右で伊邪那岐は左で山祇は上で豊酒は下で。前後左右上下を合せては日若宮と称へまつるのである。此の理は十方諸仏が一仏の妙用を分掌する名号であることと同様である。

「伊弉諾尊神功既に畢りて日若宮に歸らせたまふ」と伝へられたのは此の故である。